金日成逸話集

1

朝鮮・平壌
チュチェ96（2007）

金日成逸話集

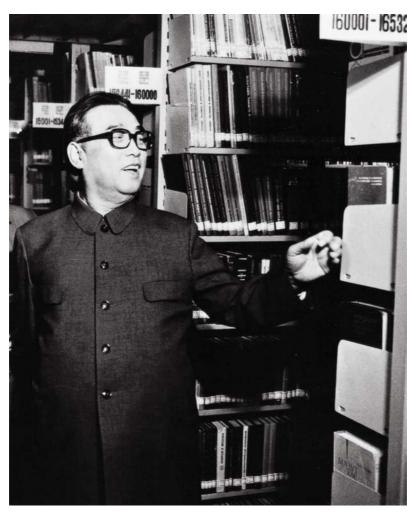
1

朝鮮・平壌
外 国 文 出 版 社
チュチェ96（2007）

労働者とともに（1961.4）

江西郡青山里の農民たちと語り合う（1958.10）

龍城機械工場の労働者を激励する（1959.3）

咸鏡北道鏡城郡の農家を訪ね、給水状況を確かめる（1972.6）

人民大学習堂の書庫を見て回る（1981.9）

始業式の日、大同門人民学校を訪れる（1972.9）

刊行に際して

　朝鮮民主主義人民共和国の金日成（キムイルソン）主席（1912 年 4 月 15 日～1994 年 7 月 8 日）は、「以民為天（人民を天のごとくみなす）」を座右の銘とし、つねに人民とともにあり、その生涯を人民のために尽くした。

　主席が断行した抗日革命の数十万里におよぶ血みどろの長征と、朝鮮の津々浦々を歩き回った現地指導のなかには、数々の逸話が残されている。

　本書はその一部をまとめたものである。

目　　次

是が非でも迷魂陣密営へ

南湖頭会議（朝鮮人民革命軍軍・政幹部会議、1936 年 2 月）を終えて白頭(ペクトゥ)山地区へ向かう途中、金日成将軍は、千古の森林地帯に位置する迷魂陣密営に立ち寄ることにした。

途上、独立 1 師団第 1 連隊第 1 中隊の隊員たちに出会ったので、彼らに密営への案内を頼んだ。ところが、以外にもたちまち引き止められてしまった。

「将軍、迷魂陣の谷間はどこもかしこも腸チフスが蔓延しています。絶対に行ってはなりません」

「患者のなかには亡くなって地中に埋められた人も大勢います。そんなところに将軍を案内するなんて、そんな冒険はできません」

腸チフスがどんなに恐ろしい伝染病なのかは、すでに遊撃区での体験を通じて誰もがよく知っていた。多くの人がその病気にかかってあえなく倒れていった。

将軍は彼らに言った。

「腸チフスといっても人の体に生じるものなのだから、いくらでも治すことができるし、払いのけることもできる。人が伝染病より強いのが当然であって、伝染病の方が強いはずはない」

だが、隊員たちも引き下がろうとはしなかった。

「人が伝染病より強いなんてとんでもありません。チフスには強者と弱者の区別などありません。あの猛者の崔賢(チェヒョン)中隊長でさ

え、腸チフスで何週間も迷魂陣で床についたままなのです」
　それを聞いた将軍はびっくりした。
「なに？　あのはがねのような崔賢も伝染病にかかったというのか？　彼が腸チフスに苦しんでいるというからには、なおさら行かねばならない」
　将軍の口ぶりには断固たるものがあった。
　自分たちの力では思いとどまらせることはできないと知った指揮官と隊員たちは、仕方なくこう懇願した。迷魂陣へは行くにしても、患者の病舎には絶対入らないでいただきたいと。
　ところが将軍は、密営に着くやいなや、真っ先に 50 人以上もいる病舎を訪ねた。
「……お願いです。入らないでください！　入ってはだめです！」
　見る影もなくやつれはてた崔賢が、戸口に向かって這い出そうとしながら叫んだ。
　将軍はベッドに近づくと、毛布の中に引っ込める彼の手をぎゅっと握った。
　崔賢の目に涙がにじんだ。またたくまに病舎は涙の海と化した。
　その後、病魔にさいなまれていた患者たちは、将軍の熱い同志愛に支えられて闘病に励み、回復してそれぞれ戦列に戻っていった。

雪の上に生まれたお墓

　抗日武装闘争時期の厳冬のある日。朝鮮人民革命軍の主力部隊は、鯉明水付近で不意に襲撃してきた日本軍「討伐」隊と激戦を

繰り広げた。激しい戦闘の末、敵を撃破した部隊はすみやかに戦場を去った。

ところが突然、行軍休止命令が下った。疲労困ぱいした隊員たちはどっとその場に座り込んだ。休息の命令だと思ったのだ。

金日成将軍が言った。

「諸君！　しなくてはならないことがもう一つある。われわれは戦死した同志の遺体を葬らないままここまで来てしまった」

隊員たちは将軍の言葉ではっと気がついた。危急の状況にあって、戦友の遺体をそのままにしてきてしまったのだ。

部隊はすでに戦場から 40 キロ余り離れたところまで来ていた。吹雪はいっそう激しく吹き荒れ、目的地はまだはるかに遠い。

だが、将軍は断固として言い切った。

「引き返して彼を葬ってあげようではないか」

将軍は決然といま来た方向へと向き直り、先頭に立って腰まで埋まる雪をかき分けて行った。隊伍は将軍の後を追った。

2 日目になって、やっと隊員の遺体を探しあてることができた。

この 2 日間というもの、睡眠はもちろん食事さえとらなかった将軍は、隊員の遺体をなでつつ嗚咽（おえつ）を漏らした。

目を閉じた隊員の顔に、雪がしきりと降り注いだ。隊員たちは涙をこらえ、凍てついた土を掘りつづけた。

やがて白雪に覆われた密林のなかに、ひときわ目立つお墓が生まれた。

長老の不届き

1936 年の夏、白頭山地区のとある林業村に朝鮮人民革命軍の主力部隊が立ち寄った。

伐採所の労働者たちは、金日成将軍に会えるものと思って欣喜雀躍した。

ところが、遊撃隊員はみながみな同じ軍服を着ているので、誰が将軍なのか見分けがつかなかった。

「一体どなたが将軍様なんです？」

遠目なりとも金日成将軍に一度お目にかかりたい、という切実な願いを抱いて人々は口々にたずねたが、答えてくれる者はいなかった。

そんなとき、村の長老格の年老いた労働者がさも自信ありげに言った。

「金日成将軍様は縮地の術を使う天下の名将なのだから、多分年からしても、風格からしても普通の兵士とは違うはずだ。だから、身なりの違うお方を探せば間違いなく将軍様であろう」

いかにももっともらしい話だった。

労働者たちは身なりの際立った遊撃隊員を探そうと、あちこち走り回った。

だが、いくら探し回っても、そのような隊員は見当たらなかった。

それでも、そのなかにどことなく他と違って見える人が一人いるにはいた。

労働者たちは、もしやその人が将軍様でなかろうかとささやき合った。

だが、長老は一向に取り合おうともしなかった。

「馬鹿を言うのもほどほどにしろ。あの人は隊員の食事をまかなう事務長だぞ。わたしは食事の準備で一緒に出かけたのでよく知っている。それに考えても見ろ。いくらなんでも、将軍様があんな身なりをしているはずはない」

労働者たちは、長老の「訓示」を聞いてまた四方八方探し回った。だが、部隊が村をたつ寸前までとうとう探すことはできなかった。ことここに至って、労働者たちは「事務長」に聞いてみようと長老をそそのかした。

長老も最後の機会を逃してしまいそうなので、仕方なく「事務長」をつかまえて熱心に頼み込んだ。

「事務長さん、村民はみんな金日成将軍様にお目にかかりたがっているのですから、どなたが将軍様なのかちょっと教えてくださいな」

ところが「事務長」はなぜか、返答を避けてほほえむだけだった。すると、隊員のなかからにわかに爆笑が沸き起こった。

長老は訳が分からず、おろおろするのみだった。

「事務長」が彼に近寄って親しげに言葉をかけた。

「私たちは日本帝国主義と戦う朝鮮人民革命軍です。だから、将軍もみんなと一緒に近いところにいるはずです」

「えっ？　近いところにですと？　すると、将軍様はこの村に来られなかったというのですか？」

長老はそう言うと、肩を落としてその場にへなへなと座り込ん

でしまった。
　これを見た部隊の給養担当官が老人を抱き起こして言った。
「金日成将軍はいま、あなたの前におられます」
　彼はびっくりして目を凝らした。
　目の前で明るく笑っているのは、質素な身なりの「事務長」その人だった。
　長老は、「将軍様！」とのどをつまらせて膝を折った。
「私の不届きをお許しください。人を見る目がなく、つい事務長だとばかり思っていました」

３０元

　1937 年の春、朝鮮人民革命軍の主力部隊が東崗近くの密営に駐留していたときのこと。
　夜中に遠方監視所で歩哨に立っていた隊員たちが、収穫前の畑からトウモロコシをもぎ取ってくるという不祥事が起きた。何日もの間、穀物を口にすることができず、糠と水で飢えをしのいでいる戦友たちを思ってのことだったが、畑の持ち主の許しを得ずにしたことなので事件として見なさざるを得なかった。
　金日成将軍は、今すぐ持ち主を探してくるよう厳命を下した。
　隊員たちは数時間後に、白髪の中国の老人を連れてきた。
　将軍は陳謝し、現金 30 元を差し出した。
　老人は飛びあがらんばかりに驚いた。そして、わずかなトウモロコシのために隊長が謝るとは何事か、革命軍からお金をもらう

とはもってのほかだ、村人たちが知ったら私を責めるに決まっている、お金もトウモロコシも持ち帰るわけにはいかないと言い張った。

　それはたいへん有難いことだったが、将軍は懸命に老人を説き伏せようとした。

　老人は仕方なく、お金とトウモロコシを背のうに入れて村に戻ることにした。老人は村まで送ってくれた隊員に、あの革命軍の隊長は誰なのかとたずねた。

　隊員は隠すことなく教えてやった。

　金日成将軍であることを知った老人は深く恥じ入り、一家総出で早々にトウモロコシを収穫し、そりに積んで再び将軍を訪ねた。将軍は、老人の真心をこれ以上断ることはできなかった。

　老人は、漫江の岸辺に沿って 2 里ほど下ると朝鮮人参を栽培している畑があり、そこに行けばトウモロコシを大量に買うことができるので、お力添えをさせていただきたいと言った。

　こうして、数百名の隊員の 1 カ月分以上の食糧と塩を容易に手に入れることができた。

チョンガー作男の縁談

　抗日武装闘争の時期、金日成将軍が長白地区に進出して活動していたときのことだ。10 数戸しかない吉城村という小さな村に滞留していた将軍は、ひょんなことから金月容（キムウォルヨン）というチョンガーの作男と知り合った。

人柄は実直そのものだが、作男の身の上なので娘を嫁にくれる人はなく、30を過ぎても結婚できずにいた。

ふしくれだった手、見るにしのびない身なり……。

その日の晩、彼の身上を思いつつ一夜を明かした将軍は、村をたつ前に宿泊した家の張(チャン)老人に頼みごとをした。

「おじいさん、ご迷惑かもしれませんが、頼みごとが一つあります。昨夜私は、金月容の行く末を案じて眠れませんでした。村のお年寄りたちが相談して適当な相手を見つけ、婚礼も挙げてやってはいかがでしょう」

「将軍様にそんなご心配までおかけして、申し訳ありません。相談したうえで、なんとかして結婚させますからご安心ください」

村の老人たちは約束を守った。作男の金月容は良い相手を紹介され、結婚することになった。娘を嫁がせたのは、十八道溝寺谷に住む金(キム)老人だった。将軍が心配される人なら娘を嫁にやってもいいと言って、吉城村に来て縁談をまとめたのだった。

その知らせを聞いた将軍は給養担当副官に、戦利品のなかから良質の布地と食料品を選んで吉城村に送り届けるよう指示した。

「将軍、どうしても贈り物をしなければならないのですか」

副官の意外な問いかけだった。

「もちろんだ。気のりがしないのかね？」

「正直言って、贈りたい気持ちにはなれません。一生に一度の結婚式を盛り切りの飯ですませ、戦場に散っていった戦友たちが思い出されて……」

将軍は彼の心中を理解した。

「それを考えれば、私とて胸が痛む。だが君、われわれが盛り

切りの飯で結婚式を済ませているからといって、人民もそうしなければならないというほうはないだろう。……民族再生の一念に燃えて銃を執った朝鮮の青年たるものが、金月容一人の結婚式ぐらい準備してやれないというのか」

副官は、その日のうちに贈り物を用意して吉城村に届けた。

この話はまたたくまに西間島一帯に伝わった。

あくる年の 5 月下旬。祖国の地・普天堡（ポチョンボ）への進軍を間近に控えたある日、再び吉城村を訪ねた金日成将軍は、金月容の家に立ち寄って結婚を祝福した。

厳しく批判された副官

朝鮮が解放された直後、金日成将軍の使っていた寝室と応接室はきわめて簡素なものだった。

寝室には鉄製の寝台が一つ、応接室にはテーブルが一つ置かれているだけだった。

これを気にかけていた副官は、寺洞（サドン）の家具店でベッドと机、じゅうたんを買い求め、部屋を模様替えした。

前より部屋が明るくなったと、みんなが喜んだ。

ところが、その日の夕刻、宿所に戻った将軍はたちまち厳しい表情になった。

「この家具は誰が持ち込んだのだ」

「私が……」

副官は口ごもりながら答えた。

将軍は厳しくとがめた。―― 君は何のために部屋の模様替えをしたのかね。人民の生活状態を知りながら、こんなことをするのかね。祖国は解放されても、労働者、農民は貧しい暮らしからまだ抜け出していない。だというのに、われわれが今からぜいたくな生活に染まってしまったら、どうやって革命を続けていけるというのか。われわれは決して、ぜいたくをするために革命に身を投じたのではない。今、われわれは国を早く豊かにし、そして強くして、一日も早く人民の生活を向上させることに全力を注がなければならない――

そして、将軍はきっぱりと言った。

「誰を問わず、われわれは人民の生活水準を超えてはならない！」

70 歳老人の珍妙な頼み

1946 年のある日、夜中の 12 時が過ぎたころ、執務中の金日成将軍に面会を求めてくる老人がいた。

将軍に慕われている齢（よわい）70 の民主政党所属の人士だった。

非常に潔癖なこの老人は、訪ねてきた理由を打ち明けにくそうにしばしためらっていたが、やがて重い口を開いた。

「この老いぼれが、みっともないことを言うととがめないでください。まったく恐縮なお願いですが、野生の朝鮮人参か、鹿茸のような強壮剤を少々用意していただけないでしょうか」

老人はこう言うと顔を赤らめ、もじもじした。

将軍は座るようにと勧め、どうしたわけかとやさしくたずねた。

「最近、若い女を後妻に迎えたのですが、冷たくあしらわれて困っているのです。……将軍、なんとか助けていただきたいのですが……」

想像だにしなかった珍妙な頼みだった。

将軍は、彼の心中をさっしてこう言った。

「お助けしましょう。夫人が先生をみだりに軽んじないように」

老人は嬉々として帰っていった。

しばらくして将軍は、老人に頼まれた薬剤を手に入れて送ってあげた。

やがて1年が過ぎ、70を過ぎた老人は男の子をさずかった。

将軍もたいへん喜び、誕生100日目の祝いに呼ばれた。

それから 50 年近い歳月が流れた。金日成主席はそのときのことを感慨深く回想し、**「彼は普段の生活で困ったことがあると、それを隠さず私に打ち明けたものだ」**と老人を懐かしんだ。

結婚披露宴になった誕生祝い

朝鮮が解放された翌年の1946年の春のことだ。

金日成将軍の補佐係りが抗日の女性英雄金正淑(キムジョンスク)女史を訪ねてきた。

解放後、将軍が初めて迎える誕生祝いの手はずを決めようと相談しに来たのだった。ところが金正淑女史はすでにその準備を始

めていた。
　将軍の誕生祝いは、以前から多くの人が気にかけていたことだった。
　金策（キムチェク）をはじめ抗日革命闘士は、毎日のように金正淑女史を訪ねてはこう言った。
「私たちが山中で戦っていたころ、将軍には一度も満足な誕生祝いをして差し上げられず、いつも心苦しい思いをしたものですが、今度こそはその償いをさせていただきたい」
「将軍はきっと国情を考えてとどめるでしょうが、なんとしても誕生祝いをして差し上げなければいけません」
　こうした経緯があって、金正淑女史は内密に祝いの準備を始めていた。
　ある日、自宅に戻った将軍はこの気配をさとって、何かあるのかね、とたずねた。
　金正淑女史は、まずいことになったなと思いながら答えた。
「将軍が凱旋して初めて迎える誕生日が近づいてきたものですから、パルチザン当時の戦友たちと夕食でも一緒にしてはと思って少々準備しているのです」
　将軍は、**「夕食を一緒にするというわけだね……」**と言い、しばらく考えてから、料理を余分につくるよう求めた。
　それを聞いた抗日革命闘士たちの喜びはひとしおで、解放された祖国での初めての誕生祝いを意義深いものにしようと真心を尽くした。
　とうとう待ちに待った誕生日がきた。
　お祝いの挨拶をしようと将軍の自宅にかけつけた抗日革命闘士

たちは、そこで意外な光景を目にした。
　将軍が受けるべき誕生祝いの膳の前に、一組の青春男女が座って結婚式を挙げていたのだ。
　前々から両親をなくして育った未婚の抗日革命闘士の結婚式について心を配っていた将軍が、自らの誕生日に用意された祝いの膳をそのまま結婚式の祝いの膳にしたのだった。ことのいきさつを知った金策は、恨めしそうにこう言った。
「将軍、凱旋して初めての誕生日ですのに、将軍の誕生祝いをして差し上げられなかったことを人民が知ったら、どんなに残念がるかしれません。結婚式は後日にしてもよかったではありませんか」
　将軍は穏やかな笑みを浮かべて、こう答えた。
「……誕生日だの何だのと、そんなことは言わないでほしい。これからもそうしてもらいたい」
　そして、一対のオシドリのように並んで座る青春男女に満足げな視線を送った。
　人民と革命同志の幸せな姿を目にするのが、将軍の人生の楽しみなのだ。

北朝鮮人民委員会委員長と幼い日直

　解放後、各学校で初の国家主催の卒業試験が行われていた 1947 年 7 月のある日、平壌（ピョンヤン）第 2 小学校に数人の幹部が訪れた。
　校舎は日本帝国主義統治時代からのもので、玄関が狭いうえに日も差し込まないため薄暗かった。

それでも、玄関の右側に置かれた机に日直の腕章をつけて座っていた 11〜12 歳の女子生徒は、課された任務を忠実に務めていた。この女の子は、玄関から入ってくる幹部たちに折目正しく少年団式の敬礼をすると、それを受けて廊下の方へ向かおうとする幹部に、よく通る声で「受付をすませてから入って下さい」と要請した。

「受付をすませて入れというんだね……」

引き止められたその幹部は、笑みを浮かべながら振り返った。

「そうだ、規則を守らなくてはいけない。そうだそうだ」と言って、女子生徒に近寄ったその幹部は、差し出された受付帳と鉛筆を手にした。

そして低い机のうえに腰をかがめ、求められた通りに面会する人の名前や日時、用件を書き込んだ。

それから腰を伸ばすと、次の欄には何を書けばよいのかと静かな口調でたずねた。

「職場と職務、それに名前を書き入れて下さい」

幹部はまた腰をかがめて書き込んだ。

「北朝鮮人民委員会委員長　金日成」

（なんということを、わたしはおおばかだわ、将軍様も見分けられなかったなんて……）

少女は戸惑い、ただ顔を赤らめるだけだった。

「若花婿」への親書

荒い麻の半ズボン姿で放浪生活をしていた一人の青年が、解放

後に立派な軍人に生まれ変わり、金日成将軍の身辺で服務する光栄に浴することになった。

1949 年 11 月のある日、将軍に呼び出されて急いでかけつけてみると、すでに幾人かの同僚が来ていた。

彼らは整列して到着したことを報告した。

将軍は、彼ら一人ひとりの手をやさしく握り、今日呼んだのは所帯を持った君たちに休暇をやるためだと述べた。

この青年はびっくりして、そばにいる同僚たちをそっと横目づかいで見た。全員が既婚者であるのは間違いなかった。

（しかし、私が結婚しているとどうして分かったんだろう）

彼は顔がほてるのを覚えた。

まだ年端もいかぬ彼は、同僚から「若花婿」と冷やかされはしないかと心配し、結婚して 1 年たってもそれを「絶対の秘密」にしていたのだ。

だというのに、その「秘密」を将軍が知ったのは、彼にはどう考えても不可解なことだった。

将軍は彼の学習ノートを検閲した際、妻あてに書いた手紙が差し込まれていたのを目にしていたのだが、そんなことは知るよしもなかった。

彼らは分厚い封筒をひとつずつもらった。

将軍は、**「この封筒は、汽車に乗って出発した後に開きなさい。それまでは絶対に見てはならない」**と念を押し、一人ひとりと握手をした。

そしてこの若い戦士にはとくに、家に帰ったら、子どもを国の立派な担い手に育てるよう妻に伝えてもらいたいと話した。

彼は感きわまって、感謝の言葉も満足に述べられなかった。

汽車が出発するやいなや、懐に大事にしまっておいた封筒を取り出して開いてみた。

その中には、現金 3,000 ウォン（旧紙幣）と将軍の新書が入っていた。

「このお金でまず酒とタバコ、それにタバコ入れとキセルを買って帰省しなさい。そして、残りのお金で祖父母とお母さんの衣服をあつらえ、その実行状況を私に報告しなさい」

封筒を持った彼の手に、大粒の涙がしたたり落ちた。

汽車で「帰郷」した牛

朝鮮戦争（1950 年 6 月～53 年 7 月）の期間、最高司令部が高山鎮（コサンジン）にあった 50 年 11 月のある日のこと。

最高司令部直属のある人民軍区分隊を視察していた最高司令官金日成将軍は、その区分隊が牛を屠殺していたことを知った。

その牛は、区分隊の軍人たちが清川（チョンチョン）江の渡し場に通じる球場（クジャン）――香山（ヒャンサン）間の道路を行軍中、主人とはぐれた牛を集めて引いてきた数頭のうちの一頭だった。

指揮官は別に考えもせず、足をくじいた牛を屠殺したことを報告した。

最高司令官は、これをただならぬ事だと見なした。

そして、これは大きな過ちだ、もちろん君たちが主人とはぐれた牛を引いてここまできたのはよいことだが、足をくじいたからとい

って屠殺したのはたいへんな過ちだと厳しく叱責し、こう言った。

「今ヤンキーどもは占領地域で牛や豚、鶏などの家畜をかたっぱしから屠殺している。……ヤンキーどもはヤンキーどもで屠殺し、われわれもまたわれわれでどうのこうのと口実をつけて屠殺してしまえば、この先、わが国には牛は一頭もいなくなってしまうだろう。これはまったく大きな過ちだ」

こうして初めて過ちの重大さを悟った指揮官は、気をのまれて蒼白になった。

将軍は、指揮官を見つめながら言葉をついだ。

「君たちは足をくじいた牛を屠殺したというが、治してやればすむことではないか。人が骨をいためれば治してあげるのに、牛の足一つも治せないというのか。農民にとって牛は家族も同然だ……　人民がこれほど大事にする牛をみだりに屠殺してしまったとは、君たちは大変なことをしでかしたものだ。そんなことをするなら、わが軍に冠された人民という文字は結局、意味がなくなってしまうであろう」

最高司令部に戻った将軍は、その日の夜中、牛の屠殺を厳禁する最高司令官の電信命令を各連合部隊に出した。

しばらくして、あの数頭の牛が満浦(マンポ)駅に現れた。再進撃の途についた人民軍とともに汽車で「帰郷」するためだった。

鉄道警務長は飛び上がらんばかりに驚いた。

「軍隊もまだ輸送しきれないでいるというのに、正気の沙汰か。さっさと引き下がるんだ」

だが、彼は牛を列車に乗せざるをえなかった。

牛を引いてきた軍人が、最高司令官直筆の命令書を差し出した

からだ。

18 羽の鶏と卵のかご

金日成将軍が、高山鎮林成（リムソン）村の質素な農家に居を定めていた1950 年 11 月のある日の晩。

その家の主人は、数羽の鶏で将軍をもてなそうとしたが、暗がりでつい捕らえ損なったため、鶏をばたつかせてしまった。

その音を耳にした将軍は、部屋の戸を開けて副官にたずねた。

「誰が鶏に手をつけているのだ」

「この家の主人がぜひ、鶏を使いたいといってきたのです」

「この夜中に、主人が何のために鶏を絞めるというのかね。君たちが頼んだのではないのか？　この家の主人がどうしても必要だと言うなら、買っておいた鶏が台所にあるからそれを使ってもらい、この家の鶏には手をつけないようにさせなさい」

しかし、家の主人は一度思いたったことをひるがえそうとはしなかった。

彼は鶏数羽をそっと捕らえて副官に渡し、将軍をもてなしてくれるようにと頼んだ。そして必要なら、残りの鶏も使っていいと言って立ち去った。

その数日後、用事があってまた家にきた主人は、捕らえて渡したはずの雌鶏や雄鶏が、群がって餌をついばんでいるのに目を見張った。

どうしたことかと思って鶏を数えてみると、もとの 18 羽そのま

まだった。
　ある日、将軍は、鳥小屋から産み落としたばかりの温かい卵を取り出して、「鶏を絞めて食べるよりも、卵を産ませるほうがよっぽど面白い。温かいうちに早く主人に持って行ってあげなさい」と言った。
　やがて、将軍が高山鎮をたつ日がきた。
　副官は主人を呼び、18 羽の鶏がそのまま暮らす鳥小屋の「引き継ぎ」をした。卵がいっぱい入ったかごと一緒に……。

最高司令官の防寒帽をかぶった歩哨

　1950 年の冬のある日の夕刻、検問所で警戒の任に当たっていた最高司令部付きの歩哨は、前線の視察に出かけた金日成将軍が帰ってくるという連絡を受けて、吹雪でかすむ前方を緊張した面持ちで注視していた。
　やがて、将軍を乗せた車が吹雪を突いて検問所に近づいてきた。歩哨は力強く「ささげつつ」をして敬意を表した。ところが、そのまま通り過ぎると思った車は急に止まり、将軍が降り立った。
　将軍は、歩哨の傍にきてやさしく声をかけた。
　「今日は冷えこむから寒いだろう」
　「最高司令官同志、寒くはありません」
　歩哨は元気いっぱいに答えた。
　だが、将軍は、こんな日に歩哨に立つのはきついはずだ、こんな寒い日に防寒帽もかぶらずに歩哨に立っていては、さぞかし耳

が凍えることだろう、と言って心配した。
　戦略的に一時的な後退を余儀なくされた多事多難な時期だったので、防寒帽がまだ支給されていないことを心にかけてのことだった。
　歩哨は将軍を安心させようと、ことさら元気よく答えた。
　「最高司令官同志、何ともありません」
　そういう歩哨の手を吹雪にさらされないよう両手でおおっていた将軍は、さりげなく副官に言いつけた。
　「車にある私の防寒帽と手袋を持ってきたまえ」
　副官が持ってきた防寒帽と手袋を受け取った将軍は、それを歩哨に差し出して、**「かぶっている帽子を脱いでこれをかぶりなさい」**と言った。
　歩哨は恐縮のあまり、姿勢を正して力強く答えた。
　「最高司令官同志、これで大丈夫です」
　将軍は、彼の気持ちを察して明るく笑い、かまわないから早くかぶるようにと促した。けれども、歩哨は受け取ろうとはしなかった。
　すると将軍は、自ら彼の帽子を脱がし、防寒帽をかぶせてやった。そして、少し大きいが後ろをつめてかぶれば大丈夫だと言って、耳隠しをおろして紐で結んでやった。
　そして、**「この手袋もはめなさい。これなら寒くないはずだ」**と言って、歩哨の手袋を脱がして自分の手袋をはめてやった。
　「最高司令官同志……」
　歩哨は感激のあまり、言葉を継ぐことができなかった。
　それから少したって、交替の隊員を引率してきた歩哨長はびっ

くりして声を上げた。

「君のかぶっている帽子は、最高司令官同志の帽子じゃないか！」

軍医所に届けられた米

1951 年初頭のある日のことだった。

最高司令部を訪ね、久しぶりに金日成将軍と一緒に食卓についた叔父の金亨禄（キムヒョンロク）は驚いた。

食卓に並ぶのは、一粒の白米も混じっていない粟飯と干し葉のみそ汁、それにキムチ、それがすべてだったからだ。

もちろん叔父は、将軍の気心を知らないわけではなかった。だが、国の運命を双肩に担っている将軍が、健康管理をおろそかにし、昼夜の別なく無理をしてもしものことでもあったら一体どうするのだ、と叔父は心の内をもらした。

すると将軍は笑みを浮かべ、**「今、国中の人民がヤンキーとの戦いで耐乏生活を強いられているというのに、私だからといってどうして米のご飯を食べられるというのですか。いつも人民と同じように生きてこそ、気が楽になり、食欲も出るのです」**と言った。

どうしようもないなと悟った叔父は、家に帰るとすぐ、しまっておいた多少の籾米を真心こめて精白した。そして、是非このお米でご飯を炊いて将軍をもてなしてほしいという手紙と一緒に、お米を最高司令部に送った。

けれども、将軍は、そのお米を最高司令部の近くにある軍医所に送るよう指示した。
　のちにそれを知った叔父は、目をうるませてひとりごちた。
「将軍はそうした人なのだ。分かり切っていながら、もしやと思ってしたことが……」

夏に綿入れ軍靴をはいた最高司令官

1951 年 8 月、かんかん照りのある日のこと。金日成将軍は、来たる冬に供給する軍服の試作品を検分した。
　陳列台の上には、十数着の冬用の軍服や帽子、手袋、綿入れ靴などが並べられていた。
　幹部の案内を受けてそれらを検分していた将軍は、**「着用する兵士たちの意見を聞いてみよう」**と言って、軍人たちを呼び、服を着させてみた。
　軍靴をはかせては、編み上げ部分の長さやゴムを当てた縁の幅、底の厚さなどをきめ細かくあらためた将軍は、これを一足持って行こうと言った。
（どうしてなのだろう）
　翌日、幹部たちはじつにびっくりさせられる光景を目にした。
　将軍が、あの綿入れ軍靴をはいて外に出てきたのだ。
（こんな暑い日に、なぜ綿入れ軍靴を……）
　あまりにも突飛で解せないことだったので、幹部たちは好奇の目を向けた。

将軍は次の日も、またその次の日も、一週間ほど綿入れ軍靴をはいて出歩いた。

うっとうしく降りつづいていた雨のやんだある日、将軍は、その靴をはいたまま工兵たちの作業場へと向かった。

ぬかつく道を歩いて作業場に来た将軍は、軍人たちに一つ相談したいことがある、と言って、自らはいてきた綿入れ軍靴について意見を求めた。

今年の冬は、兵士たちにこういう靴をはかせようと思うのだが、君たちの考えはどうだろうか、とたずねた。

真夏に将軍のはいた兵士用の綿入れ軍靴を物珍しそうにながめていた軍人たちは、うれしげに答えた。

「最高司令官同志！　とてもよいと思います」

すると将軍は、ただよいとばかり言わずに、欠点も言わなくてはもっとよい靴がつくれないではないか、と促した。

そう言っても欠点を指摘しようとしない軍人たちをしばし見つめていた将軍は、こう言った。

「この靴を何日かはいてみて、暖かくてはき心地のよいのは分かったが、水が染み込みやすくて、足が凍ってしまうのではないかと心配だ」

そして、ゴム張りをした縁を指差しながら「張り方が浅いので、それほどでもないぬかるみでもズックの部分がこんなに濡れてしまった。わが国の冬はみぞれの日が多く、雪が解けて地面がどろどろになることがたびたびある。綿入れの靴であっても、足を凍らせてしまうのが心配だ」と語った。

将軍は指で弧を描きながら、ゴム張りの縁をこういうふうに深く

してはどうかと思うのだが、君たちの考えはどうかな、とたずねた。
軍人たちは、そのようにすれば申し分ありません、と答えた。
将軍は、満足げに笑いながらも、よいとばかり言わずに、不格好に見えはしないかも考えてみてはどうかな、と言いたした。それに応えて、一人がゴム張りを深めにするのも軍人を思ってのことなので、見慣れればなんでもないのではないかと思う、と答えた。
それを聞いた将軍は大いに満足し、君の考えは私とまったく同じだと言った。
「君たちがいいと言うのだから、ゴムは深めにすることにしよう」

緊急の措置

1951 年 8 月のある日、金日成将軍は痛嘆すべき訃報に接した。金日成総合大学の許憲（ホ ホン）総長が新学期の始業式に出席するため目的地に向かう途中、敵の爆撃を受けて亡くなったのだった。
真夜中に舟で川を渡っていた際、爆撃で舟が転覆し、遺体も見つかっていないという。
報告した者は、川は水かさが増えて流れも激しく、遺体は海に押し流されたようで捜索は困難だとつけ加えた。
将軍はそういう彼をたしなめ、いかに海は広いとはいえ、国の貴い人材である総長を探せないというのは論外だ、どんなことがあっても探さねばならない、海の底をくまなくさらってでも必ず探し出さなければならない、と強い口調で言った。

そして即座に、3,000 名余りの軍人を捜索作業に動員させる緊急措置を講じた。

その時期は、敵の無謀な「夏季攻勢」が始まって間もないころだった。時々刻々と緊迫の度を増す前線の状況からすれば、これほど多くの軍人を遺体の捜索に振り向けるのは尋常なことではなかった。そのうえ、30 年来の大洪水という自然の猛威にも見舞われていた。

それから 16 日たって、定州（チョンジュ）の沖合でようやく許憲総長の遺体が見つかった。

葬儀は将軍列席のもと、国葬として執り行われた。

その日、戦況がますます緊迫化したなかでの臨席に恐縮しきっていた遺族に、将軍はこう言った。

「いや、何がどうであれ、許憲先生はこれから黄土へと旅立たられるのです。……いたたまれなくて来たのです」

将軍はこう言うと、自ら棺の先端を肩にした。

内閣決定第 203 号

1952 年 1 月 20 日。

金日成将軍の呼び出しを受けた保健省のある幹部が、最高司令部に到着した。彼は米軍による細菌爆弾投下の蛮行に関する対策案を提出した際、かなりの額の資金を拠出してくれるよう要請していた。

彼は落ち着かない気持ちで待っていた。

ところが、将軍の言葉は実に意外だった。

「いま人民は、前線と後方を問わず、至るところで戦争に勝つためにわが身をかえりみず戦っています。こういう愛国的で献身的な人民のためなら、何も惜しむことはありません。全人民を対象に無料治療制を実施しましょう」

彼はしばし呆然としていた。

驚きを隠し切れずにいる彼を笑みを浮かべて見つめていた将軍は、話題を変えて、今は人民にどの程度の治療費を支払わせているのかとたずねた。

彼は、労働者、事務職員は国家社会保険制度によって無料で治療し、農民と個人商工業者からは外来治療費を取り、労働者、事務職員の扶養家族からは薬代の 40%ほどを取っている、と答えた。

「40%……」

独りごとのようにつぶやいてしばらく考えこんでいた将軍は、次のように言葉をついだ。

「もちろん今、わが国の事情は多少困難に直面しています。だが、われわれは、人民の生命を積極的に守るために無料治療制を実施すべきです。われわれにとって、人民の生命ほど貴いものはありません」

それから 10 カ月後の 1952 年 11 月 13 日、内閣決定第 203 号「無料治療制の実施に関して」が公布された。

朝鮮で公布されたこの内閣決定について、ある国の新聞は戦争狂信者たちを次のように揶揄した。

「アメリカは爆弾の雨を降らせて朝鮮を荒廃させようとしているが、朝鮮は、原子爆弾 10 個分に匹敵する『203 号』大爆弾でア

メリカの横っ面を張り飛ばした」

思いもよらぬ走りくらべ

祖国解放戦争（朝鮮戦争）当時のこと。ある日の朝、最高司令部の作戦参謀が形容しがたいほどの焦りを感じて金日成将軍の執務室のドアをノックした。

応答がないので、さらにノックしてみたが、やはり物音一つしなかった。作戦参謀は緊張した。

（どこへ行かれたのだろうか）

前日の夕刻、彼は只ならぬ情報を受け、報告書を作成して将軍に提出していた。そこには、アメリカ帝国主義者の新たな侵攻企図とそれによって急変した前線の状況が詳細に記されていた。情勢は時々刻々と緊張の度を強めていた。

ところが、将軍が不在なので不安がつのった。

その時、将軍は、庭の片隅で最高司令部が預っている遺児と話をしていた。

「おまえは娘なんだ、そんなに太っていては、嫁にもらってくれる人がいないぞ」

「それでも、もらってくれる人はいます」

「そんな太っちょで、走れそうもない娘を、誰がもらってくれるというんだ」

「それでも、将軍様よりは早く走れます」

「私は今でも、馬なら馬、飛行機なら飛行機、なんでも乗れる

し、走れと言われればお前を 10 里は引き離して走ることもできる。そうだ、あの山の頂まで、誰が先に行ってこられるか試して見ようじゃないか」

将軍を探しているうちに偶然、この会話を耳にした作戦参謀は、将軍に甘えて遠慮もなにもなく受け答えしている遺児を気恥ずかしげに見やった。

そうこうするうち、遺児はこぶしを握りしめ、いつの間にか山の頂めがけて走りだした。

将軍は、彼女が遠くまで走り去るのを見届けてから、その後を追った。

作戦参謀は思いもよらぬ「走りくらべ」の目撃者になってしまった。

将軍は、直線のコースをとり、雑木や岩などを軽々と越えながら飛ぶように走っていった。そして、彼女が中腹にも達していないうちに、山頂をめぐって出発点に戻ってきた。

笑いがわき起こった。

若い遺児となごやかに走りくらべをする将軍の余裕しゃくしゃくたる様子を目にし、作戦参謀は張り詰めていた緊張と不安が一瞬にして消えうせるのを覚えた。

主席とはだしの少年

1955 年夏のある日、昌城（チャンソン）郡での出来事。学校から家に帰る道すがら金日成主席に出会い、折目正しく少年団式の敬礼をする児

童のなかに、はだしの子がいた。
　少年は、泥だらけの自分の足を見下ろして顔をくもらせる主席を見て、恥ずかしそうに後ずさりした。
　それを見た主席は、少年の肩に手を置いてたずねた。
　「誰と一緒に住んでいるのかね？」
　「おばあさんとお母さんです。それに弟たちもいます」
　「お父さんは？」
　「……」
　「お父さんはいないのかね？」
　「戦死しました」
　主席はそれ以上なにも聞かず、少年をぐっと胸に抱きよせた。そして随員たちに、**「見たまえ、この子に靴一つはかせてやれなかったのに、この子は私に敬礼してくれたのだ」**と言っていっそう顔をくもらせた。
　しばしの沈黙の後、主席は、家はどこで暮らし向きはどうなのかをつぶさにたずねた。そして別れぎわに、すぐに家を訪ねるからと言った。
　少年は、このうれしい知らせを早く家に伝えようと走りだした。家までの道を半分ほどきた時、急に後ろで警笛が鳴ったかと思うと、主席の車が少年の傍に止まった。
　「さあ、乗りなさい」
　少年は自分の足を見下ろしてたじろいだ。
　主席は、これから靴を買ってはけばいいのだから、と言って少年を車に乗せた。そして、少年の足を見下ろしながら心配した。
「石ころの多い道だから、足が痛いだろう。傷ついたら大変だ。

学校にも行けなくなるし……」

　すると少年は涙ぐみ、顔をうつむけた。

　やがて少年の家に着いて、祖母や母親と言葉を交わした主席は、少年と二人の弟を連れて、靴を買ってはかせてあげるよう副官に命じた。

　彼らが靴をはいて帰ってくると、それまで庭で待っていた主席は、自ら少年の靴のはき具合を確かめ、やっと安心した表情をみせた。

　少年は声をつまらせ「靴を買ってくださって……一所懸命……勉強……します」ととぎれとぎれに言うと、主席の胸に顔をうずめた。

新たに設けられた国家予算項目

　1957 年国家予算案を審議する閣議は、朝から夜遅くまで続いた。それほど、国の財政事情はひっ迫していた。

　金日成主席は報告を聞き、予算案の細部にいたるまで具体的に検討した。

　そして、ふと、在日同胞子女への教育援助費と奨学金はどの項目に入れたのかとたずねた。

　報告者はしばしためらった。

　それは、主席から前もってじきじきに指摘されていた項目だった。だが、いくら検討してみても、それに充てる資金を捻出する余地はなかったのだ。

停戦後 3 年が過ぎたとはいえ、戦争の惨禍の傷跡は工場や農漁村、都市に痛々しく残っていた。廃墟をかき分けてやっとのことで工場を建てたものの、そこに設置する機械や設備が難題となり、田畑に大きく口を開けた爆弾の跡をなんとか埋めてみても、そこに水を引く揚水機が足りない有様だった。そしていまなお半土壕状態の家に住んでいる人、国が面倒を見なければならない戦傷者、老人や子どもたち……。いたるところで緊急に求められているのは資金だった。

ややためらっていた報告者は、財政があまりにひっ迫しているので国家予算には組み入れず、別途に臨時外貨計画に盛り込みたいと思っていると述べた。

しばらく黙っていた主席は、決然とした口調で、いや、そうはできない、すぐにでも送ってやるべきだ、われわれが工場をひとつやふたつ建てられなくとも、異国の地で苦労している同胞たちに、子どもの勉学に必要な資金は送ってやるべきだ、と言った。

室内は急に静まりかえった。

主席は、閣僚たちを見まわして言葉をついだ。

奨学金を 1、2 度送っただけでやめてはならない。日本にわれわれの同胞がおり、学ぶべき子どもがいる限り、引き続き送るべきだ。それゆえ、これをその場かぎりの事業と考えてはならない。国家予算に新たに「在日同胞子女のための教育援助費と奨学金」という項目を設けて、恒久的な事業とすべきだ……。

こうして新たな予算項目「在日同胞子女のための教育援助費と奨学金」が生まれた。

道すがら出会った有難い人

1957年、夏のある日の夕暮れ時のことだ。

黄海（ファンヘ）南道載寧（チェリョン）郡富徳（プドク）里祠堂（サダン）村に住む娘婿の家を訪ねようと、出かけたおばあさんがいた。

大通りに出たところ、後ろからクラクションが鳴り、1台の車がおばあさんの傍に止まった。

「おばあさん！」

品格のある人が車から降りてきて呼び止めた。

道順でも聞くのかと思って振り返ったおばあさんに、その人は思わぬことをたずねた。

「おばあさん、どこへ行かれるんですか？」

「娘婿の家だが……」

「家はどこですか？」

「祠堂村だが」

「この道をまっすぐ行けばいいんですか」

「ええ、この道を少し行ったところだよ」

「それなら、この車に乗りなさい」

おばあさんはなんの気がねもなく受け答えをしていたが、ここではじめて戸惑いを感じた。

（一体この人はどこのどなたで、なぜこんなに親切にしてくれるのだろうか）

おばあさんはその人の手に引かれて車に乗った。杖と風呂敷包み

を受け取って後ろの窓ぎわに置き、ドアまで閉めてくれるこの有難い人を、おばあさんはそっと見やった。慈しみ深いその顔、どこかでよく目にしたような気がするが、なかなか思い出せなかった。
車が動き出した。
その人は、楽に座るようにと勧め、車酔いはしないか、子どもは何人いるのかと、一つひとつたずねると、苦労が多かったでしょう、この先は長生きして、良い世の中で暮らすようにといたわった。
やさしくされればされるほど、おばあさんはひたすら、一体この情深い人はどなたなのかと思いつめた。
やがて、車は祠堂村に通じる分かれ道で止まった。
「こんなに親切にしていただいておきながら、どなたなのか分からずにいては気がすみません」
おばあさんは、そのまま降りるのをためらってこう言った。
その人は、答える代わりににっこりと笑い、おばあさんが降りるのに手をかし、風呂敷包みと杖を渡すと、おばあさん、お元気で長生きしてください、気をつけて行ってください、と言っておじぎまでした。
おばあさんは感激のあまり、車が去ってもその場に呆然と立ちつくしていた。
そのとき、後ろから車がきて止まり、乗っていた若い人が、前の車に乗っていたのは金日成首相だと教えてくれた。
それを聞いたおばあさんの手から風呂敷包みがすっと落ちた。そして、おばあさんはその場にべたりと座り込んでしまった。
「こともあろうに、夢にも忘れなかった将軍様にお目にかかっ

ても気がつかなかったとは……」

赤ちゃんの名は「恩徳」

1961 年 9 月、歴史的な朝鮮労働党第 4 回大会が開かれた。代表が宿泊している平壌旅館を訪れた金日成主席は、女性代表の一人と言葉を交わし、家族は何人いるのかとたずねた。

彼女はすぐには答えられず、もじもじしていた。

傍にいた幹部が、夫と二人で暮らしている、と彼女に代わって答えた。

主席は「二人暮らしなのかね……。いま何歳かね」とあらためてたずねた。

彼女がか細い声で、29 歳ですと答えると、主席は「29 歳？ 29 歳……」と静かに繰り返した。

そして話題を変え、夫はどこに勤めているのか、月給はどれくらいなのかと一つひとつたずねると、ふと彼女の顔をじっと見つめた。

「ところで、顔色が良くないが、どこか悪いところがあるのでは……」

彼女は大会に出席する前、やりかけの仕事を片付けるため多少寝不足になったからで、別段悪いところはないと答えた。

「悪いところはないというが、病気が顔に表われている」

主席は顔をくもらせ、病気がないというのに、29 歳にもなってまだ子どもがいないというのはおかしい、顔色を見れば病気があ

るのは間違いない、と心配した。

主席の言葉に、彼女はおどおどしてしまった。

さらに主席は、子供を産めないからと、夫があなたにあれこれ言うことはないのかね、とたずねた。

すると、彼女の目から涙がこぼれおちた。

つね日ごろ人知れず思い悩んでいた自分の心の内を、主席が心から察してくれたからだった。

夫が不満めいたことを口にすることはなかったが、彼の前ではおのずと肩身の狭い思いをしてきた。

主席は、すすり泣く彼女に、あなたは悪いところはないというが、病気があるのは確かだ、必ず治療を受けて子どもをもうけ、健康な体になってこれからも仕事に励んでほしい、とさとした。

その後、主席から贈られた薬を服用した彼女は健康を回復し、かわいい子を産んだ。

赤ちゃんは「恩徳（ウンドク）」と名づけられた。

捨てるに忍びないズック靴

1965 年の夏。昌城郡を訪れた金日成主席は、人民の履物が気にかかって新義州（シンイジュ）製靴工場の幹部を呼び集めた。

その日、見栄えのする丈夫な靴を大量生産するよう強調した主席は、話の途中、自ら履くズック靴を見せて、「新義州製だと思うが、作りはとても良い。履きやすく丈夫なので申し分ない」とほめた。

幹部たちはそのズック靴を注意ぶかく見た。間違いなく自分たちの工場で作ったものだが、いつ生産したのか思いつかないほど前のものだった。そのうえ何度も洗ったらしく色はあせ、ゴムが劣化して靴の先がくぼみ、内底に敷皮が敷かれてあった。

そのときに主席が語った言葉が彼らの胸を打った。

「5 年ほど前に買ったものだが、まだ擦り切れていないので捨てるには忍びない」

幹部たちはこれまで、少しでも色があせたり、形がくたびれたりすると、新しい靴に履きかえてきた。倹約精神に欠けた姿勢をくい改める契機となった。

戦傷栄誉軍人がうけた祝福

1968 年 2 月のある日のこと。

金日成主席は、万景台（マンギョンデ）戦傷栄誉軍人万年筆工場を訪ねた。

工場全体が喜びと感激に沸くなか、工作作業班にきた主席は、ある機械工が加工した製品を見てから、彼にどこを負傷したのかとたずねた。どことなく彼の動作が不自然なのに気づいたからだった。主席が推察したとおり、彼は脊椎を少々傷めたと答えた。

「脊椎？!」

こう聞き返す主席は顔をくもらせた。

「どの戦闘で負傷したのかね？」

「1211 高地の戦闘です」

「ああ、1211 高地の英雄だったのか」

主席はこう言って、傷めたのはどこか、ここは痛くないか、ではここは、本当に痛くないのか、と背中のあちこちを触ってみた。

彼はすすり泣きながら、大丈夫だと何度も繰り返した。すると主席は、がらりと話題を変えて、妻はいるのかとたずねた。

彼は涙をぬぐいながらいると答えた。

しばし黙っていた主席はまたたずねた。

「子どもはいるのかね？」

「はい、4 人います」

「4 人も？」

主席の顔がにわかに明るくなった。

「そうか、良かった！　子どもが 4 人とは本当に良かった！」

主席は喜びのあまり、その戦傷栄誉軍人をぐいと胸に抱き寄せて背中をたたいた。

「子どもがいるなら大丈夫だ！」

主席は、満足げに何度もうなずきながら明るく笑った。

そして、仕事に励み、子どもたちを丈夫に育てるようにと、温かい祝福の言葉を残し、軽やかな足取りでその場を離れた。

父母会になった政治委員会

1969 年夏のある日。現地指導を終えて帰途についた金日成主席は、突然車を止めさせた。下校する児童たちの姿が目にとまったからだ。

主席は車から降りると、子どもたちを呼んだ。

子どもたちは歓声をあげてかけ寄り、てんでにおじぎをした。主席は、その子たちを愛らしげに見つめながら、どの学校に通っているのか、何年生なのか、家はどこかと細やかに聞いた。

そして、「ちょっとみんなのカバンを見せてもらおうかな」と言って、ひとりの子にランドセルを脱がせた。筆箱や教科書、ノートなどを手にとり、教科書を大事に扱っていて、字もとても上手だとほめた。

ほめられた子は、うれしさのあまりにこにこしていた。

主席は、これから家に帰って学習班で勉強をするのだね、集まって勉強をするのは、どんなよいことがあるのかね、と聞いた。

分からないことを教え合えるからいいという子もいれば、教科書を借りて見られるからいいという子など、答えはさまざまだった。

それを聞いた主席は、しっかり勉強しなさいと言い残して、子どもたちと別れた。

車は再び走りはじめた。

しばらくして主席は、独りごとのようにつぶやいた。

「子どもは本当に正直なものだ」

そして、いましがた児童のひとりが、教科書を借りて見られるからいいと言ったことが気にかかった、それは教科書が足りないということなのだ、と言って主席は顔をくもらせた。

それからしばらくして開かれた朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、教科書問題が論議された。

主席は、ほかの出版物は多少後回しにしても、教科書だけは良質の紙を使ってもっと大量に印刷すべきだと語り、必要な対策を講じた。さらに中央と道、市、郡に幹部たちで構成する新学年度

の準備委員会を設置した。

この日、主席は問題の討議をしめくくりながらこう述べた。

「われわれは児童の父母だといえる。今日、政治委員会は父母会を開いたようなものである。われわれがこうして集まりながら、子どもたちの勉強の問題を解決できなくていいものだろうか」

3年間迂回した道

1970 年の早春、金日成主席は温泉（オンチョン）一帯の現地指導のため平壌をたった。

平壌――南浦（ナムポ）間の道路を走っていた車が、龍岡（リョンガン）方面へ折れる道にさしかかったときのことだった。

「車を止めなさい」

主席は、龍岡ではなく南浦方面に車を向けるよう命じた。

副官がそっとたずねた。

「温泉へ行かれるのではなかったのですか」

「そうだ」

副官は奇妙に感じた。

温泉までは、龍岡邑を経由していけば 16 キロだが、南浦方面から行けば 24 キロもある。それに、これまでは温泉方面へ出向くときや平壌に戻るときは、いつもきまって龍岡邑を経由していた主席が、なぜ南浦方面へと遠回りをするのか見当がつかず、副官と運転手は互いに顔を見合わせた。

「玉桃里（オクト）の前を通りたくないのだ」

主席のその言葉に、副官と運転手はいっそう目を丸くした。

彼らにとってまったく意外なことだった。

それまで、玉桃里を通るのが主席の楽しみだったからだ。

龍岡郡玉桃里には、祖国解放戦争のさなかに全国農民活動者大会が開かれ、そのときに主席が賞賛した農民の英雄・林根相（リムグンサン）さんが住んでいた。

主席はこの大会で、小麦の広条播種機を考案した林根相の発言を聞いて、その誠実さと献身性を高く評価し、彼を「正真正銘の農民」と呼んできた。それ以来、20 年近くにわたって彼とは革命同志、近しい友として接してきた。

主席は玉桃里を通るときにはいつも、車をゆっくり走らせ、誰かを探すような眼差しで車窓の外をうかがった。すると、約束でもしたかのように林根相がかけつけて挨拶をし、そのたびに満面に笑みを浮かべ、時間の経つのも忘れて心置きなく営農問題について語り合っていた。

車が南浦方面の道へと入ると、主席はうるんだ声で言った。

「林根相さんのいない玉桃里の前を通るのは忍びない」

この言葉にようやく副官と運転手は、林根相が最近亡くなったことを思い出した。

不治の病にかかったことを知ってあれこれと心を砕いたが、薬石効なく帰らぬ人となってしまった。その胸の痛む追憶が蘇ったのか、主席はそっとハンカチを目にあてた。

このときから主席は 3 年もの間、温泉地区へ出向くときはきまって南浦方面へと迂回した。

つなぎ合わされた鯉の切り身

1971 年 9 月、ある日の夕暮れどき、金日成主席の宿所でのことだ。

現地指導を終えて帰った主席は、私邸で面倒を見ている総聯幹部の 3 人の兄妹を連れてダイニングルームに行った。

主席の横に座った 6 歳の末っ子は、昼間に湖に釣りに行って、誰も釣れなかった鯉を釣ってきたと自慢した。

主席に格別可愛がられていたやんちゃ坊主の末っ子は、強情っ張りなうえ、わがままもまた並みでなかった。

鯉を釣ってからというもの、誰にも触らせようとせず、鬼の首でも取ったように得意満面になっていた末っ子は、主席に向かって、自分がとってきた鯉がいま食卓に出るはずだが、それはこんなに大きいんだと、両腕を何度も大きく広げてみせた。

主席は末っ子の片腕を高くあげて、「**これくらいなんだね、そんなに大きい鯉がどうして、釣針に食いついたのかな、きっとつかまらないと思って食いついたんだろうね**」と言った。末っ子はますます調子づき、ほめられていい気になって、大きな声で料理を早く出してとせき立てた。

やがて、食卓の上に料理を盛った器が並べられた。

最後の器が置かれたとたん、泣き声があがった。末っ子は大声で泣きわめき、しまいには食卓の下にもぐり込んで足をばたつかせた。

自分が釣ってきた鯉が切り身にされて、その大きさが分からなくなっていたので、腹を立てたのだった。

兄と姉が懸命になだめたが、手に負えなかった。騒ぎ立てるこのだだっ子を、誰も食卓の下から出てこさせることはできなかった。

姉と兄はあまりのことに冷汗をかいた。

見かねた主席は**「こいつ、ただのだだっ子じゃないな」**と言って、大きな器を持ってこさせ、自ら切り身をもとの形どおりにつなぎ合わせた。そして、食卓の下にもぐり込んでいるだだっ子に手まねきをして言った。

「いいよ、鯉がもとどおりになったからもう出ておいで。本当に大きいな！」

やっとだだっ子は泣きやみ、食卓の下から這い出てきた。そして、涙の目をこすりながら食卓の上を横目で見やった。

末っ子は、目の前に自分が釣ってきた鯉がもとどおりの形で置かれているのを見ると、泣いたことも忘れてにこっと笑い、声をあげた。

「元帥おじいさま、これ、僕が釣った鯉だよ。さあ、おじいさま食べて」

主席はだだっ子を見つめながら声高に笑った。みんなも一緒に笑った。

とっておきの場所

1973 年 10 月のある日、金日成主席は牡丹峰（モランボン）に登って首都の全

景を俯瞰しながら、随行した幹部たちに聞いた。
「あそこにどんな建築物を建てたらよいだろうか」
主席は南山(ナムサン)丘を指差した。
幹部たちはすぐには答えられなかった。そこがどういうところかをよく知っているがゆえに、なおのことためらったのだ。
平壌市の復興建設計画図を作成するにあたり、主席は南山丘を首都の中心部とし、そこを軸にして街を形成する方向を提示したが、この丘だけは空き地のまま残しておいたからだった。
前方を見れば大同江の青い水がとうとうと流れ、ななめ横に立てば牡丹峰の絶景と紋繡(ムンス)原一帯が一望のもとに見わたせる南山丘は、実に素晴らしいところだった。
歳月が流れ、その周辺には大小さまざまな建築物がたくさん建てられたが、南山丘は依然として手つかずのままだった。
数年前、ある設計士がその最良の地をそのままにしておくのはもったいないとして、威厳を備えた政府庁舎を建てる設計プランを提出したことがあったが、そのときも主席はその場で棄却した。それほどとっておきの場所に政府庁舎など建てる必要はない、中心部には人民が大いに利用できる公共の建築物を据えるべきだ、というのが主席の考えだった。
このように、南山丘は主席が深い思いを寄せる場所だったので、幹部たちはどう答えたらいいのか分からなかったのだ。主席は、そもそも中心の広場には、博物館とか公民館、図書館、文化宮殿といった、人民のためになる建築物を建てたらどうか、とさとすように言った。
それから 2 カ月後の同年 12 月中旬。南山丘に登った主席は、

いまやここを整備するときがきた、平壌には文化宮殿も学生少年宮殿もあるのだから、一つ大きな図書館を建ててみよう、そうすれば学生少年宮殿では子どもたちが勉強し、ここでは大人たちが勉強できるようになる、そうすれば人民に喜ばれることだろう、と言った。

こうして南山丘に、主席の発案で人民大学習堂という意義ぶかい名を冠した全民学習の大殿堂が建設された。壮大華麗な朝鮮式の建築物はいまでもその偉容を誇っている。

張吉富女史の「喪主」に

1974 年 2 月、抗日革命闘士馬東熙（マドンヒ）の母親、張吉富（チャンギルブ）女史が死去したときのことだ。

葬儀の準備を担った係りは、難題にぶつかった。張女史には喪主となる人がいなかったからだ。

父母が亡くなれば、子どもたちが喪主となって弔客を迎え、葬礼を執り行うのが先祖伝来の習わしだが、張吉富女史は祖国解放の聖戦に息子、娘、嫁をすべてささげた天涯孤独の身だったので、この場合どうしたらよいのか途方にくれてしまった。

相談の末、金日成主席に事情を伝えることにした。

「張吉富女史の葬儀は、主席の配慮で国葬にすることにしましたが、誰が喪主を務めて弔客を迎えたらよいのか、子どもがいないので困ったことになりました」

幹部の話を聞いた主席は、無言のまま窓辺に近づき、100 歳ま

では生きてもらいたかったのに、亡くなられてしまった、と哀惜の念にとらわれた。

張吉富女史は享年 91 歳。

主席は、自分が喪主を務めるから、遊撃隊出身の将官たちにも手伝ってもらい、故人の葬儀を誠意をつくして執り行うことにしようと言った。

それを聞いた幹部は、こう答えた。

「金日成同志、そんなことはいまだかつて歴史になかったことです」

すると主席は、歴史になかったことだとしても、そのようにしたらいいではないかと言った。

翌日、弔問に訪れた人たちは張吉富女史の棺を前に意外な光景を目にした。

身寄りのなかったはずの女史は、金色の将官星をつけた五人の「息子」と、白装束の五人の「嫁」に見守られながら、安らかな眠りについていた。

大みそかの病気見舞い

年の瀬もおし迫った 1983 年 12 月 31 日の夕暮れどき。

金一（キムイル）（当時副主席）の自宅に、いますぐ金日成主席が訪問するとの連絡がもたらされた。

病を患っていた金一は、驚きのあまり一瞬緊張した。病床にあっても日夜、主席を思ってやまなかった彼だったが、いつにもま

して多忙なはずのこんな日に、突然来られるとは思ってもみなかったことだ。
　家のものたちは慌てて部屋を片づけはじめた。
　ところが、何分も経たないうちに主席が到着した。整理しかけの部屋に気さくに入ってきた主席は、金一の手をしっかりと握った。
　「金日成同志！」
　彼は主席に手をあずけたまま、やっとの思いで挨拶をした。病気治療のためにあらゆる手を尽くしてもらったうえ、ご足労を煩わせてそれを申し訳なく思い、涙が出るほど感謝していた。
　主席は病状や治療についてつぶさにたずねた。
　彼は主席の問いに答えてから、いまだに出勤できないことを心苦しく思っていると言った。
　それを聞いた主席は、これまでやり遂げた仕事からしても、あなたには休む権利がある、と温かい言葉をかけた。それでもなお恐縮していると、主席は、あなたが今も往年の情熱を持ち続けていることを満足に思っていると述べ、なんとかして彼の心を和らげようと気を配った。
　そして主席は、金一と初めて会ったときのことを感慨深く回想した。
　だが、永い歳月にわたる厳しい戦いの道で積もりに積もった思い出を分かち合うには、あまりにも夜は短かった。
　主席は、やつれおとろえた彼を見るのが忍びなく、話は後ですることにして、正月だから酒でも一杯酌み交わしてはどうか、酒のほうは医者がどう言っているのかとたずねた。
　金一がさもつらそうに、今は禁じられていると答えると、主席

は体に悪いなら仕方ないと言ってしばし沈黙した後、病気と忍耐強く闘ってほしいと励ました。主席はさらに何か言おうとしたが、とっさにあふれ出た涙に目の前がかすんで顔をそむけた。

金一も涙声になって「金日成同志、どうか健康に留意して下さい。もうお年なのですから、絶対に無理はしないで下さい」と、かろうじて言った。

主席はそれ以上、その場に居たたまれなくなったのか、席を立った。

「ありがとう。……長いあいだ起きていては疲れるだろうから、私はこのくらいにして帰ることにする」

だが、主席はすぐにはその場を離れられなかった。

そして、金一を見つめながらうるんだ声で言った。

「毎年、迎春公演を一緒に観覧してきたのに、今日は一緒に行けなかった。しきりに涙が出て、満足に観覧できなかった。それで、会いに行こうと言ったのだ」

主席は彼の手をとったまま、その場にたたずんだ。

大紅湍の烈士の墓

1985 年の春、金日成主席の側近のある若い幹部が、白頭山革命戦跡地の参観を終えて帰って来た。

主席は喜んで彼を迎え、参観について感想を聞いた。

彼は、自分が見て回った革命戦跡について感じたことを忌憚なく話した。

話を聞いた主席は、大紅湍（テホンダン）にも行ってみたかと聞いた。

彼はもちろん行って来たと答え、桃色のツツジが広野に咲き乱れた大紅湍を見晴らすと、抗日の日々、司令官同志に従って祖国に進軍した朝鮮人民革命軍の隊員になったような気分になったと話した。

「大紅湍にも行ってみたんだね」

主席はこう問い返すと、そこに抗日闘士の墓が一つあるのだが、訪ねてみたかと聞いた。

彼は思わず言葉につまってしまった。闘士の墓があることなど知らなかったからだ。

主席は、私もそのことを思いつかなかった、大紅湍に金世玉（キムセオク）という抗日革命闘士の墓があるのに、その墓に献花するよう君に言うのを忘れていた、と言ってたいへん悔やんだ。

主席は、金世玉は平素はとてもおとなしい隊員だったが、ひとたび戦闘となると勇猛果敢に戦った、彼が祖国解放の日を見ずに逝ってしまったのが無念でならない、としみじみと語った。

その日、主席は、その烈士の墓に献花するよう言いそびれたことが胸にわだかまり、昼食の時も夕食の時も同じ言葉を繰り返した。

執務室の砲台鏡

1985 年 12 月 31 日のこと。

呼び出しを受けて金日成主席の執務室に入りかけた幹部は、思

わずその場に立ちすくんでしまった。
　窓の向こう越しに砲台鏡をのぞき込んでいる主席の様子が、いかにも熱を帯びているようで、人の気配も感じとれないようだったからだ。
　どうしたことなのか訳の分からない幹部は、しばらくして何をご覧になっているのですか、とようやく声をかけた。
　その声のほうに振り向いた主席は、砲台鏡から離れると君も一度のぞいて見るようにと促した。
　彼は、好奇心がわいて砲台鏡をのぞき込んだ。視野に入ってきたのは大城山(テソンサン)革命烈士陵だった。その瞬間、烈士陵の革命烈士たちがいまにもかけつけてくるような幻覚にとらえられた。
　彼は砲台鏡を抱いたままむせび泣いた。
　そんな彼を見つめていた主席はうるんだ声で、革命戦友を思い出すたびに大城山革命烈士陵を眺めている、今日も革命烈士陵を眺めていると、彼らがこの世にいたときに何かもっとしてやれなかったことが悔やまれてならない、と胸の痛みを語るのだった。

600 年ぶりの王氏の系図と玉璽

　1992 年 5 月のある日。早朝に開城(ケソン)市に到着し、しばしの休息もとらず市内の遺跡や文化遺産を見て回った金日成主席は、市内から北西八キロほどのところにある王建(ワンゴン)王陵を訪ねた。王陵をしばらく見渡しながら思いにふけっていた主席は、王建はわが国初の統一国家である高麗(コリョ)を創建した始祖王でありながら、陵はみすぼ

らしい、このままにしておいては、太祖王は地下に眠っていてもわれわれを呪うだろう、歴史学者たちに建築家と協議して、修築する案を作成するようにと指示した。

これを聞いた王氏家門の後裔たちは、幾晩も眠れずに感激の涙にひたり、相談の末、代々大事にしてきた家宝の王氏の系図と玉璽を主席に献上することにした。

この王氏の系図と玉璽は、1392 年に高麗王朝が崩壊した後、李（リ）成桂（ソンゲ）一党による王氏一族惨殺の際にも辛くも難を逃れ、幾人かの王氏の子孫が六百年もの長い間にわたって保管してきたものだった。

「王建家門の系図が現れたと？　よい時世だからこそ、こんな珍事もあるのだろう」

主席はこう言って、王氏の系図と玉璽を見た。そして、高麗太祖の王建はわが国に初の統一国家を建てた人物である、高麗がわが国初の統一国家だったからこそ、私は統一した国の名を高麗民主連邦共和国とすることを提議したのだと述べながら、系図を一枚一枚繰っていった。

王建の肖像に目をとめた主席は、見るからにして好男子だったなと、豪快に笑った。

そして「開城王氏系図」と王建の玉璽を大切に保管するよう指示し、王氏家門の子孫の殊勝な行いを称賛して彼らに贈り物をした。

大朴山のふもとの檀君陵

1993 年 9 月下旬のある日、金日成主席は、平壌市江東（カンドン）郡江東

邑にあった檀君（タングン）陵を訪ねた。それほど大きくもない陵墓は永い間風雪にさらされてさびれ、見る影もなくなっていた。

主席は、そんな陵墓を沈痛な面持ちで見てまわりながらこう言った。

「檀君陵はすごいものとばかり思っていたが、実際に来てみると小さい。……それでも、李朝五百年の間に何か少しくらいは手が加えられているのではないかと思っていたのだが、なにもされてない」

陵墓を見終えた主席は、陵の位置がよくない、ほかの地の利の良いところに移し、りっぱに改築しなければならない、私が見ておいた場所があるからそこへ行ってみよう、と一行を促した。

主席は彼らとともに大朴（テバク）山のふもとに来ると、車を止めさせた。そして、周辺の緩やかな丘陵をしばらく目を凝らして眺めていた。

大朴山を背にした丘陵は眺望が開けていて、すっきりとした美しい姿を見せていた。

主席は満足げに言った。

「檀君陵を改築する位置としては、文興（ムンフン）里のドルメン遺跡があるこの丘陵の頂が最適だと思われる。この頂に立つと、大城山革命烈士陵のように前方がすっきりと開けて見晴らしがきく。道路からも近いし、車で参観にくるのにも便利だから、ここに檀君陵を建てるのがよさそうだ」

その言葉に老学者は感嘆した。

「ここはまったくうってつけの場所です」

「そうだ、うってつけの場所だ。ここに檀君陵を造ればさぞかし素晴らしいだろう」

その後、主席は「檀君陵を立派に改築することは、わが国が五千年の悠久の歴史をもつ国であり、朝鮮民族が生まれたときから一つの血脈を継いできた単一民族であり……平壌が檀君の生まれた朝鮮民族のもともとの故郷であることを示すうえで重要な意義を持つ」として、檀君陵再建委員会を発足させた。

そして、改築工事の方向を明確に示すとともに、朝鮮民族の始祖王の陵らしく遜色なく完成させる改築案の作成を指導し、委員会が作成した最終案を具体的に検討したうえで署名した。

1994 年 7 月 6 日のことだった。

この決裁文書は 7 月 7 日の祖国統一文書とともに、金日成主席にとって最後の親筆署名文書となった。

改築工事が完成したのは、主席が逝去（1994 年 7 月 8 日）した年の 10 月 11 日だった。

その日、檀君陵の落成式が盛大に挙行された。

限りなき献身の最後の 1 日

生涯最後の日となった 1994 年 7 月の 7 日。その日も金日成主席は多忙をきわめていた。

午前に祖国統一に関する文書を検討して署名した主席は、つづいて洪水防止対策に関する事業を指導した。そして、午後には対外活動と原油発電所建設の事業を指導し、夜はまた夜で休むいとまもなく執務に没頭した。そのため、夕食もとっていなかった。

あまりに無理をするのを気遣った補佐が言葉をかけた。

「主席、お食事を……」

「まだ欲しくない。もう少し仕事をすれば、食べたくなるだろう」

「食事もとらずではお体にさわります」

主席は、しわがれた声でもの静かに答えた。

「ありがとう。……だが、われわれが人民のためになすべきことはどんなに多いことか……。私が仕事をやめれば、君たちの最高司令官にそれだけ重荷を負わせることになる。金正日(キムジョンイル)同志が、国の大小すべての仕事を一人で背負って、どれほど多くの仕事をしていることか。金正日同志が人民のために夜も寝ずに働いているのを見ると、一時も休むことはできない」

夏の夜はしんしんと更けていった。高齢 80 の主席のエネルギッシュな活動はつづいていた。文書に目を通しては電話をし、また文書に目を通しては……。

主席の人民のための献身的な最後の日課は、このようにして過ぎていった。

金正日総書記は、生涯最後の瞬間までひたすら党と革命、祖国と人民のためにすべてを尽くした主席の限りない献身についてこう語っている。

「偉大な金日成同志は、党と革命、祖国と人民のために精力的に活動し、執務室で亡くなりました。金日成同志は殉職したのです。生命の最後の瞬間まで精力的に活動し、きちんと締めくくりをつけて旅立った指導者は、この世に金日成同志ただ一人であり、この面からしても、金日成同志は本当に偉人の中の偉人でした」

金日成逸話集 1

著　者　金光日　朴学日　韓正燕
編　集　金盛模
翻　訳　洪英基　金正愛
発行所　外国文出版社
住　所　平壌市西城区域西川洞

ㄱ-78392